

ひかりのこ

2月園便り
聖ミカエル幼稚園
2016年1月21日

月主題：いっしょに

『良く生きる』

2学期の終業式でもお知らせいたしましたが、ハッピー・チルドレンで英語を教えてくださいましたハシニさんとともに、いつも一緒に幼稚園に足を運んでくださっていた、三村佳代子先生が、今年の11月27日、ご病気により永眠されました。41歳の若さでした。三村先生はハシニさんの所属する空手道場「清心会」の館長を務めていた方です。先生は長い間、がんと闘っていらっしゃいました。ご自分がこのご病気と分かってからは、一日一日を大切に、空手に専念し、子どもたちや若者に空手や、得意の英語を熱心に教えていらっしゃいました。それだけでなく、スリランカから来たハシニさんが日本での生活に困らないようにと、お姉さんのようにいつもハシニさんを支えたそうです。誰に対しても、丁寧で、笑顔を絶やさず、心を込めてお話をしてくださる方でした。つい、10月のハッピーチルドレンにもハシニさんと共に幼稚園に来てくださり、「子ども達を見ると元気がもらえるんです。本当に毎回来るたび、みんな大きくなってびっくりですね。」と、優しい目でお話していらっしゃいました。

私は、告別式に参列しました。告別式では、生前、先生が丁寧に丁寧に毎日を過ごされていたこと、たくさん子ども達や仲間に慕われていたことが紹介されました。若くして亡くなることになり、本当に無念だったろうなあ、と感じるとともに、たった41年間の人生だったけれど、本当に『良く生きた』人だなあ、と感じました。

近い方の死に直面するとき、私はいつも「じゃあ、自分はどうなんだ？」と考えます。「良く生きられているのだろうか。」と、自問し、背筋がピンと伸びてきます。

私は、現在夜間と休日、教育大学大学院に通い、臨床心理の勉強をしています。大学院を受けるときは、「子ども達のため、お母さん方のため、もっと発達についてきちんと勉強し直したい！」と思っていましたが、最近は、宿題の多さや学習内容の難しさに、ちょっと参っていた時でした。なんだか、三村先生から、「園長先生、子ども達のためでしょ。しっかりして！」と喝を入れられた感じです。

大学院は大変ですが、発見と再確認の毎日です。「そんな見方があったのか。」「長年、自分がじっくりしなかったのは、こういうことなんだ。」

「やっぱり、自分の保育の方針は、正しかったんだ。」

もう少ししたら、保護者の皆さんや、子ども達のために本当にお役に立てる私になれると思います。三村先生の生きる姿勢をお手本にして、頑張っていこうと思います。

園長 渡部良子

キリスト教保育

「幸せになりなさい」

朝日新聞の朝刊に連載されている鷺田清一氏の選による『折々のことば』を楽しみにしています。各方面の多彩な人々の重たいことば、さりげないけど記憶に残ることばが紹介されています。

先日の特集で、中高生が聞いた『折々のことば』の入賞作が載っていて、私は深い感動を覚えました。その中で、現在中学1年生の女の子が、小学校の卒業式の日担任の先生から聞いたことばが紹介されていました。「幸せになりなさい。先生からの最後の宿題です」ということば。卒業式が終わった後の最後の学級会での発言でした。「提出期限は生きている間」と付け加えられたともあります。その学級会の先生と生徒たちの眼差し、空気が伝わってくる生きたことばです。

もし、自分が直接このことばを聞いたら、どんなふうを感じるだろうと想像してみます。新しい未知の世界に踏み出す前の、不安の中にいる自分です。何があっても、すべて自分が頑張らなければならないと思うと、期待よりも孤独感が強くなります。最近は社会の中で「助けて」と言えない風潮があると指摘されるほどです。そんな時、「幸せになりなさい。それが宿題」と言ってくれた先生は、これからも繋がっている大切な支えだと思えるはずですよ。

思えば私たち大人は、自分の力で勝ち上がり、生きてきたと思いがちです。しかしそれは大きな間違いで、恐らく今の自分がこうして生かされているのは、自分の力が半分、誰か他の人の支えが半分なのではないでしょうか。その証拠に大人は昔、支えがなくては生きられない子どもだったという、否定しようのない事実があります。

子どもの自分も今の自分の一部であることを思い出すと、私は肩の荷が下りたような気がします。そして「助けて」と叫んでいいのだということを知るのでした。

チャプレン 下澤 昌